

続拾遺集についての一考察

——体言止め、恋の歌の配列よりみて——

武内章一
井上寿彦
加藤英夫
小池邦光
山口

二十一代集についてはすでに種々の論究がなされてきているが、その評価において、一般に新風・新傾向があるとされている集は、八代集においては後拾遺集、金葉

集・千載集・新古今集があり、また十三代集においては玉葉集・風雅集・新続古今集などの各集がある。私たちがここに取り上げた続拾遺集に関しては、これまで文学史においても和歌史においても、たとえその名があげられ一応解説が加えられることはあつても、その特色が特に取り上げられ云々されることは少なく、殆んど注目されることは無かつたといつても過言ではない。

私たちは二つのテーマ、「二十一代集における体言止めについて」と「二十一代集における恋の歌の配列について」について調査を行ない、その結果としてこの続拾

遺集について興味ある事実を発見したので、ここにその一端を報告する次第である。

1

体言止めについては、詳しくは「名古屋大学国語国文学」(第九号、昭和36・十)所収の「二十一代集における体言止めについて」を参照していただきたい。この稿でも、体言止めというのは、第五句が純粹な体言で終止しているもののみを指している。体言止めに準ずるものに関しては、いずれ稿を改めるつもりである。なおテキストは国歌大観本を使用し、短歌と異なる歌体の取り扱いは、その歌体の如何にかかわらず短歌と同じように取り扱っている。

二十一代集における体言止めは、先にも發表した如く

総歌数三三七三九首中六七九七首、二〇・一%となり、
 総歌数の約7%をしめている。

いま体言止めの使用率の高いものから順に少しあげる
 と、(詳細は別表1・2参照)

総歌数 体言止め %

風雅集 二二一一 六五七 二九・七

続拾遺集 一四六一 四〇八 二七・九

新続古今集 二一四四 五七三 二六・七

新後拾遺集 一五五四 四〇九 二六・三

新拾遺集 一九二〇 四七八 二四・九

玉葉集 二八〇一 六八六 二四・五

新古今集 一九八一 四六九 二三・六

となる。こうして見ると、風雅集・新続古今集・玉葉集・
 新古今集など、所謂新傾向を持つといわれる集と体言止
 めの技巧との間に何らかの関連——しかもかなり重要な
 ——があることは、想像に難くないところである。

さて、いま問題とするところの続拾遺集は、右表にお
 いて実に第二位の高位をしめるのであるが、その前後の
 各集との関連を見てみると、続拾遺集(二七・九%)は
 その前の続古今集(二〇・七%)と次の新後撰集(二三・
 〇%)との間にあつて高い峰をなしているのであり、第

五位、第四位の新拾遺集(二四・九%)、新後拾遺集
 (二六・三%)の二集が徐々に第三位をしめる新続古今
 集(二六・七%)に向つて上昇しているのとははつきり
 と区別され、今迄注目されることが殆ど無かつただけに
 一層注意される必要があると考えられる訳である。

次に、二十一代集において各集にほゞ共通に設けられ
 ている部立として、四季の部と恋の部及び雑の部の三つ
 の場合を取りあげて、その各々に含まれる体言止めにつ
 いて調べてみると(詳細は別表3・4参照)

一 四季の部

総歌数 体言止め %

1 続拾遺集 四七〇 二〇二 四三・〇

2 風雅集 八九八 三六六 四〇・八

3 新続古今集 七四四 二九三 三九・四

となつて、四季の部の体言止めについては、続拾遺集は
 実に二十一代集中、第一位の使用率である。

ii 恋の部

総歌数 体言止め %

1 新古今集 四四六 七四 一六・六

2 続拾遺集 三三一 五二 一五・七

3 新続古今集 五五三 七九 一四・三

となり、続拾遺集は第二位をしめる。

III 雑部の部

	総歌数	体言止め%
1 風雅集	六三〇	一九八 三一・四
2 新拾遺集	三九四	一〇一 二五・六
3 新続古今集	四七一	一一五 二四・四
………		
13 続拾遺集	二四八	三六 一四・五

となつて、この部については続拾遺集は四季の部、恋の部の場合とは逆に平均を下廻り、十三代集中では、新後拾遺集に次いで最下位から二番目の低率をしめる。

かくて続拾遺集のみを取上げ考えてみるに

	総歌数	体言止め%	順位
全体	一四六一	四〇八 二七・九	2
四季部	四七〇	二〇二 四三・〇	1
恋部	三三一	五二 一五・七	2
雑部	二四八	三六 一四・五	13

の如くであり、全体として二七・九%で第二位となり得たのは、四季部の四三・〇%という二十一代集中最高の使用率に負うている所が甚だ多い事が知られるのである。恋部においては第二位とはいいながら一五・七%の使用

率であり、この様に第一位、第二位とはいいながら%で非常なひらきを示している事については、四季部と恋部における体言止めの使用に関する相違として前号に考察した所であるが、ここに特に注目される事は、雑部における事実である。一四・五%の使用率からすれば、恋部におけるそれとは少しのひらきしかないのであるが、十一代集中実に第十三位という下位に位するのであり、そして別表4の如く四季部、恋部の折線により知られる事は、続拾遺集に前後する続古今集・新後撰集に対し続拾遺集が峰をなしているのであるが、これに対し雑部の折線においては逆に谷を形成し、著しい対比をなしている事である。集全体として第二位、四季部としては第一位、恋部としては第二位をしめるこの集が雑部において第十三位をしめる谷を形成しているという事は如何なる事の意味するかがここに問題となるのである。昨年十一月の名古屋大学国文学研究室発表会において、私たちは「続拾遺集に関する一考察」という題目で続拾遺集の特異性について二、三発表したが、その折、松村先生からこの続拾遺集雑部において体言止めが激減している原因について御質問をいただいた。その後雑部における四季的配列の歌と体言止めについて多少なりとも考察し

た点を以下に記し、先生の御質問に対するお答えの一部
としたいと考える。

雑部には四季歌的グループ、恋歌的グループ、哀傷歌
的グループ、述懐歌的グループ、その他いろいろな傾向
の歌が含まれている。私たちはこれらの雑部の体言止め
の使用率について四季歌的グループの歌の多い集には体
言止めの歌が多くなっているのではないかと考えてみた。

というのは、「名古屋大学国語国文学第九号」の「二十
一代集における体言止めについて」において調べてみた
ように、体言止めの歌は平均してみると四季部三〇・〇
％、恋部九・三％、雑部一八・二％の割合で含まれてお
り、四季部では平均がぐんと高くなっている。(詳細は
前号並び表3、4を参照していただきたい。)したがつ
て、雑部において四季部に入りうべき性格の歌が多けれ
ば体言止めの歌も多いのではないかと考えたからである。

そこで雑部の配列をしらべてみると、雑部の中で春夏
秋冬の順に並べられて居り四季歌的性格を有する歌群の
あることがわかった。又、雑部のほかに雑春、雑秋の部
がたてられている集があり、その集の雑部には四季歌的
性格の歌が少ないこともわかった。それにより、以下考

察の便のため、まず①雑春、雑秋という部立のある集に
おける雑部の体言止めの使用率はどうなっているか、に
つき考え、次いで②雑部において四季部のような順序で
歌が配列されている巻の体言止めの使用率はどうなつて
いるか、について考えてみた。

① 雑春・雑秋と体言止め

雑春・雑秋という部立のある集は、二十一代集中、
拾遺集、続拾遺集、新後拾遺集の三集である。

これらの集においては続拾遺集雑下の哀傷歌(一一
八四―一三四二)の一部(一一二八四―一三一五)が春
夏秋冬の順に配列されているのを除き、雑部の中に四
季の配列は含まれていない。続拾遺集雑下の三二首は、
本質的には哀傷歌であり、四季歌と同様に考えること
はできない。即ち、雑春、雑秋という部立が別にある
集には、雑歌における四季歌的性格の歌の配列は、原
則的には見られないといえよう。これらの集の雑部の
体言止めの使用率は拾遺集六・九％、続拾遺集一四・
五％、新後拾遺集一一・二％となっており、いずれの
集においても二十一代集全体の雑部の平均一八・二％
を下廻っている。(別表3参照のこと。)

一方、雑春・雑秋の配列は、雑春の中に夏の歌を含

み、雑秋の中に冬の歌を含み、しかも四季部と同様に
ぼく時の経過に従つて四季の順に配列されている。拾
遺集の雑春・雑秋が四季部とも雑部とも離れて恋部の
後に位置しているのとは異なり、続拾遺集、新続拾遺
集は四季部に属しており、その性格も四季部に非常に
近いものと考えられる。しかし例えば続拾遺集雑春の
五〇二―五〇八に見られるように、純粋に四季の景物
を詠じたのでなく、内容は述懐的なものであるがその
季節が春に属しているという歌もあり、一概に四季部
と同様に扱ふことはできない。歌の内容の四季部との
微妙な相違が、体言止めの使用率に於て、雑春・雑秋
の平均が続拾遺集で二七・六%（一九二首中五三首）、
新後拾遺集で三一・五%（二六七首中八四首）という
数字に示されているというのではできないであろうか。
（四季部の体言止め使用率は続拾遺集四三・〇%、新
後拾遺集三七・三%。拾遺集は、体言止めの技法がま
だ大きな影響力を持つていなかつたと考えられるので、
考察の対象からはずす事とする。）

いずれにしても、雑春・雑秋の部がニュアンスの違
いを持ちながらも四季部に接近している事実は明らか
であり、体言止めの使用率も雑部の平均より高いのは

当然といえよう。雑部の体言止め使用率に於て、新古
今集以後では新後拾遺集・続拾遺集の二集がそれぞれ
一一・二%、一四・五%と最低の数字を示しているの
も、雑春・雑秋の存在によつて四季歌の要素が少なく
なつたということと説明できないであろうか。念のた
め、続拾遺集・新後拾遺集の雑部に雑春・雑秋を加え
て体言止め使用率を出してみるとそれぞれ二〇・二%
二二・七%となり、二十一代集の平均を少し上まわる
数字が出てくるのである。

② 雑部における四季部的配列と体言止め

雑部において春夏秋冬の順に歌が配列されている集
は別表5の如くであり、雑春・雑秋という部を立てて
いる続拾遺集・新後拾遺集を加えれば、新古今集以後
の十四集では、雑部において多かれ少なかれ四季部的
に配列することが試みられているわけである。なおそ
れが各集とも雑部の最初の巻（雑上・雑一）に於て行
なわれている事に注目すべきである。

雑部の歌の内容は雑多であり、四季部の如く自然の景
物を詠じた歌ばかりではない。（例えば哀傷という部立
のない集には雑部の中に哀傷歌の大きいグループがしば
しば見られることはよく知られているし、その他、
出家・除目・司召・懐旧など人事に関する歌のグルー

も多々みられるのである。)雑春、雑秋と同様に、雑部の中で四季部の配列をとつている場合も、四季部の要素の大きいことは認めつゝ、やはり四季部とは区別して考える必要がある。

実際に各集の四季部の配列の行なわれている巻の体言止め使用率を調べてみると、新勅撰集雑一の一六・〇%が同集の四季部はもとより雑部の平均一七・〇%より低いのを除き、どの巻もそれぞれの集の四季部の平均と雑部の平均との中間に位置する数字を示していることがわかる。つまり、体言止めに關する限り、雑部内における四季部の配列の部分は、雑春・雑秋という部立てと同様な意味で雑部(それ自体非常に雑多な性格のものであるが)と四季部との中間的な位置をしめ、体言止めの使用率も一般の雑部平均より高いのではないかと考えられる。

雑部は四季部、恋部と異なり、非常に雑多な要素を含んでいるので、その性格も簡單には規定することができない。機会をあらためて更にくわしく調査してみたいと考えている。

以上、続拾遺集の体言止めについて見てきたが、四季

部、恋部において第一、二位の使用率を示し、雑部においては雑春・雑秋の部が他にたてられている結果、第十三位の使用率を示しており、しかも全体として第二位の使用率を示しているなど、そこにかたりの特色を認めることが許されてよいと思われる。

2

体言止めの点ばかりに限らず、私たちの調査のもう一つのものである恋の歌の配列——恋の部において四季の題材からみた歌の配列——においても、興味ある結果が得られている。

恋の部の歌が恋の経過によつて配列されている事は、小沢正夫博士の「三代集の恋の部の配列について」(日本文学研究昭24・九)・松田武夫博士の『詞花集の研究』(至文堂刊・昭35・二)に述べられて以来、ほぼ定説となつているが、撰者によつてその配列に多少のニュアンスの違いが見られることは当然である。

恋の歌において、恋の情を述べるにあたり物によせて詠ずることはしばしば行なわれる手段であり、その中に四季の風物がよみ込まれることも多い。この場合に、連關的配列という意味で、同じ題の歌を並べた結果として同じ季の歌が並ぶという例(たとえば、七夕によせて恋

の情を述べる歌が続けば、秋の季が並ぶことになる。一は、非常に多い。そうした性格の更に發展したものと、四季の風物によせて恋の情を詠じた歌で、春から冬にかけての完全な形を備えてその季節順に従つて配列されている例が見られるのであるが、こうした性格の配列が完全な形で行なわれているのは、二十一代集を通じてもわずかに六例を数えるすぎない。その六例中の一つが続拾遺集である。勿論後にも述べる如く、不完全な形で四季の順の配列に従つている場合もいろいろあり、その相違については極めてデリケートなものがあるのであるが、こゝでは完全な形で四季の順の配列に従つている場合のみをとりあげ、考察の対象としたい。

次にそれらの巻々を概観してみると、

① 古今集 卷十一 恋一

読人不知の歌群の後部より巻末にかけての十首。(番号は国歌大観番号)

- 542 春たてばきゆる水の残りなく
 きみが心はわれにとけなむ 春
- 543 明けたてば鯉のをりはへ鳴き暮らし
 夜は螢のもえこそわたれ 夏
- 544 夏虫のみをいたづらになす事も

545 一つ思ひによりてなりけり
 夕さればいとど難き我袖に 夏

546 秋の露さへおきそはりつゝ
 いつとも恋しからずはあらねども 秋

547 秋の夕べはあやしかりけり
 秋の田のほにこそ人を恋ひざらめ 秋

548 秋の田のほにこそ人を恋ひざらめ
 などか心に忘れしもせむ 秋

549 光のまにもわれや忘るゝ
 人ぬもる我かはあやな花薄 秋

550 などかほに出でゝ恋ひずしもあらむ
 沫雪のたまればかてにくだけつゝ 秋

551 我物思ひのしげき比かな
 奥山の菅のねしのぎふる雪の 冬

けぬとかいはん恋のしげきに 冬

(以下は春1、夏2、秋5、冬2のように簡略化して記すことにする。)

この古今集の例はわずか十首ではあるが、恋の歌が、四季の順に意識的に配列されていると考えられ、後に続後撰集・続拾遺集・玉葉集・新千載集などの各集に、より発達した形でこのような配列の現われる萌芽となつた

のである。

② 統後撰集 卷十四 恋四

春2、夏8、秋18、冬6、計34首

これは、巻の中頃から巻末にかけて配列され、その歌数からいつても完全な意識の下にまとまつた形で配列されたものとして最初の例である。

③ 統拾遺集 卷十四 恋四

春8 夏13 秋20 冬8 計49首

これは、統後撰集恋四の配列をうけつぎ、等しく巻の中頃から巻末にかけて配列されており、歌数からいつても統後撰集をさらに発展させたものとして考えられよう。

この場合、統拾遺集の撰者為氏は、統後撰集の撰者為家の子であり、父の方針をうけつぐということは十分に考えられることである。

④ 玉葉集 卷十二 恋四

春6 夏15 秋39 冬1 計61首

統後撰集、統拾遺集の恋四では四季の順による配列の歌が巻の中頃から巻末にかけて配列されているのに対し、これは、巻頭から巻の中頃までに配列されており、等しく四季の順で歌を配列する方法をとりながら、さすがに玉葉の新風といわれるだけのことはあり、二条家に対抗

して、異なつた手段において特色を示そうとする京極為兼の意図の一端をうかがうことができるのである。

⑤ 統千載集 卷十一 恋一

春2 夏2 秋2 冬1 計7首

一応完全な形を備えてはいるが、非常に小規模のものである。

⑥ 新千載集 卷十四 恋四

春8 夏9 秋25 冬17 計59首

巻の中頃から巻末にかけての配列であり、統後撰集、統拾遺集と同様を傾向である。

以上概観した如く、古今集恋一において小規模に試みられたと思われる恋の部における四季部の配列は、十三代集の中、統千載集において恋一で小規模に見られるほか、統後撰集、統拾遺集、玉葉集、新千載集のそれぞれの集の恋四の巻において大規模にかなり意欲的に行なわれているのである。

この様な配列が多く恋四の巻に見られる理由については、確実な根拠はあげ得ないが、恋四ともなれば恋の経過としてもかなり後期となり、配列に趣向をこらす必要があつたこと、及び統後撰集以後そのような配列は恋四に置くことが一種の習慣になつたのではないか、などの

点が考えられるが詳しくは後考を待ちたい。

続拾遺集は、こうした配列において、以上にあげた各集の中で特に特色の著しい集というわけではない。が、恋の部の中において四季部的配列を持つこと自体がすでに大きな特色であり、二十一代集の合計すれば百に近い恋の巻々のなかにあつて僅か六例の一つに入つてゐることを思えば、撰者爲氏のこうした配列意蘊は注目されて然るべきであらう。

なお、四季部的配列が一部不完全な形のものとして次の諸例がある。

古今集 恋二

春1 夏2 秋7 夏1 春3 冬1

拾遺集 恋三

春2 夏4 秋1 夏12 秋10 冬5

〔□□の箇所には無季の歌が入る〕

新古今集 恋四

春4 夏2 秋29 冬1 冬1 冬1

続古今集 恋一

春1 夏2 秋3 冬1

この中、拾遺集恋三、新古今集恋四などは不完全な配

列とはいへ、それぞれ三四首、三八首という大きなグループを形成している。本稿では一応完全な配列のものをとりあげたが、いずれ機会をみて考察したい。

3

恋の部における四季部的配列の調査と同時に行なつた二十一代集の恋の部における配列状態の調査で、恋の部の各首の歌が前後の歌とことばの上でどのような連続性を持つてゐるかという点についても私たちはある程度の結果を得ている。

この結果を数字に表わすことは、その可否についても疑問があり、非常に危険なことであるが、試みに前後の歌とことばの上で何らかの連続性を持つて配列されてゐる歌の比率を調べてみると、古今集から千載集のグループが六〇―七〇%の比率であるのに対し、新古今集では八〇%台(約八七%)と増加し次の新勅撰集で七〇%台に下り(約七八%)、その後、続後撰集、続古今集と八〇%台が続く。そして続拾遺集を契機として以下十集はすべて九〇%以上で、殆ど一〇〇%に近い高い比率を示している。但し、参考例(別表7)に見られる如く二重三重の連関を持つてゐる場合は考慮に入れていないので、八代集の初めの頃に比べ、十三代集の後半頃は、こ

うした数字に見られる以上に甚しい連続性の深まりがあると考えられる。これは、明らかに撰者の配列意識の向上を示すものではあるが、一面では後期の歌の類歌性がこれを助けている事も明らかであり、この二つの作用により連続的配列の緊密性が増加したものと思われる。そして、こうした連続の緊密性において統拾遺集がその境に位しているという事は、これまで考えてきた諸点と相俟つて、統拾遺集の特性を物語る一つといえよう。

(この調査に関しては、恋の部だけでなく全部立てにわたる配列状態の調査の必要や、更にどういふ種類の配列が増加しているかという点の考察の必要もあるが、その複雑さの故に十分な考察に及び得ないでいる。)

以上、体言止めの点、恋の部の配列に関する二点など

から見た時、今迄殆ど無視されていた統拾遺集について再検討する必要があるのではないかということがいえようである。今日撰者爲氏の歌論を見ることはできず、彼の歌学論を簡単にうかがい知ることにはできないが、爲氏は統後撰集以下の勅撰集に二三〇余首の入集を示し、歌人として一応の力量を見せている。その意味でも、少なくとも統拾遺集に関する限り、かなり高い撰者としての意識を持ち、種々な特色を出そうとはかつたと思われるのである。

その他統拾遺集の作者についてなど調査すべきことは多いが、今回は問題提起に止めておきたい。

この考察の未熟なことはいうまでもないが、諸賢のご批判を得て一層充実したものにするべく努力したいと考える。

表1 集別体言止め

	総歌数	体言止め歌数	体言止歌数	
			総歌数 × 100	
古今集	1100	63	5.7	
後撰集	1426	59	4.1	
拾遺集	1351	79	5.8	
後拾遺集	1220	97	8.0	
金葉集	713	62	8.7	
詞花集	413	41	9.9	
千載集	1287	172	13.4	
新古今集	1981	469	23.6	
新勅撰集	1376	263	19.1	
続後撰集	1377	295	21.4	
続古今集	1925	399	20.7	
続拾遺集	1461	408	27.9	
新後撰集	1612	354	22.0	
玉葉集	2801	686	24.5	
続千載集	2148	467	21.7	
続後拾遺集	1355	253	18.7	
風雅集	2211	657	29.7	
新千載集	2364	513	21.7	
新拾遺集	1920	478	24.9	
新後拾遺集	1554	409	26.3	
新続古今集	2144	573	26.7	
計	33739	6797	20.1	

表2 集別体言止めグラフ

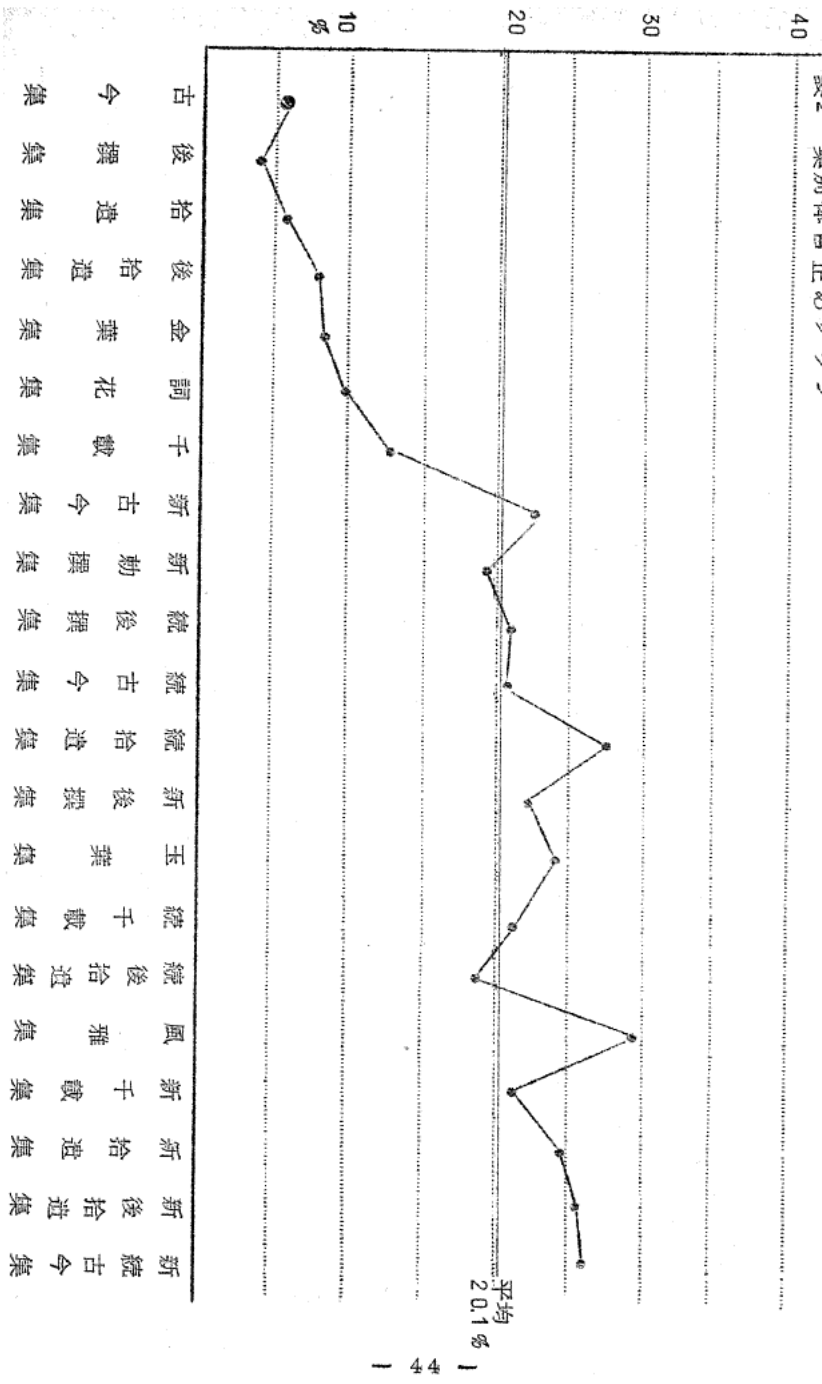


表 3

雑の歌の体言止め			恋の歌の体言止め			四季の歌の体言止め			
	体言止め歌数	総歌数		体言止め歌数	総歌数		体言止め歌数	総歌数	
5.7	8	138	3.1	11	360	7.9	27	342	古今集
6.1	14	229	2.5	14	568	5.3	27	507	後撰集
6.9	10	144	3.4	13	379	8.0	21	262	拾遺集
5.1	17	329	6.1	14	229	11.8	50	424	後拾遺集
6.1	10	162	5.6	10	180	12.6	40	325	金葉集
9.1	13	142	6.0	5	84	12.6	20	159	詞花集
9.0	22	243	6.3	20	317	21.2	101	476	千載集
18.8	79	418	16.6	74	446	32.2	227	706	新古今集
17.0	54	317	8.3	33	395	32.8	145	442	新勅撰集
14.6	39	267	11.6	44	378	30.4	161	531	続後撰集
19.7	74	375	7.9	35	444	30.8	212	689	続古今集
14.5	36	248	15.7	52	331	43.0	202	470	続拾遺集
18.9	68	359	10.4	46	442	34.3	182	531	続後撰集
22.5	179	793	7.6	44	577	35.8	371	1037	玉葉集
20.0	80	400	11.9	70	596	31.2	221	708	続千載集
18.3	48	261	8.0	27	399	26.8	134	500	続後拾遺集
31.4	198	630	9.7	43	450	40.8	366	898	風雅集
17.7	93	525	10.3	65	631	36.1	265	734	新千載集
25.6	101	394	10.6	49	461	35.2	238	676	新拾遺集
11.2	23	205	12.1	41	339	37.3	215	576	新後拾遺集
24.4	115	471	14.3	79	553	39.4	293	744	新続古今集
18.2	1280	7050	9.3	789	8497	30.0	3519	11737	計

表 4

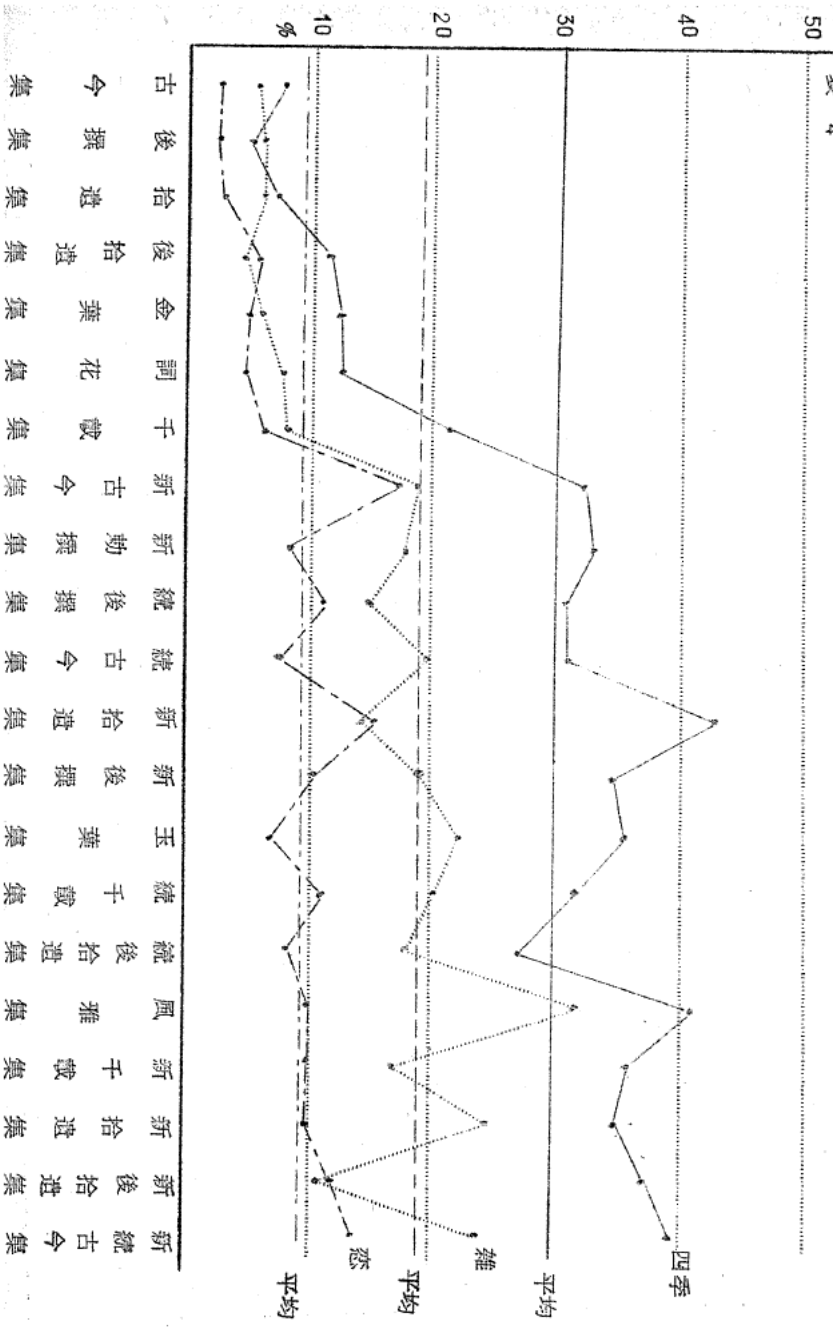


表5 雑部における四季部の配列一覧表

集名	巻	部立	歌数	大観番号	四季部の配列部分			
					歌数	大観番号	体言止め歌数	体言止め総歌数 ¹⁰⁰
○新古今集	十六	雑上	152	1435~1585	152	1435~1585	34	2 2.4
○新勅撰集	十六	雑一	100	1025~1124	100	1025~1124	16	1 6.0
△続後撰集	十六	雑上	97	1005~1101	74	1028~1101	16	2 1.6
○続古今集	十七	雑上	150	1492~1641	150	1492~1641	36	2 4.0
△新後撰集	十七	雑上	140	1212~1351	131	1221~1351	33	2 5.2
○玉葉集	十四	雑一	237	1816~2052	237	1816~2052	67	2 8.3
△続千載集	十六	雑上	185	1629~1813	172	1642~1813	54	3 1.4
△続後拾遺集	十五	雑上	88	960~1047	72	976~1047	16	2 2.2
○風雅集	十五	雑上	213	1400~1612	213	1400~1612	86	4 0.4
△新千載集	十六	雑上	207	1641~1847	188	1660~1847	42	2 2.4
○新拾遺集	十八	雑上	199	1527~1725	199	1527~1725	65	3 2.6
○新続古今集	十七	雑上	199	1606~1804	199	1606~1804	61	3 0.6
計					1887		526	2 7.9

〔註〕○印の巻は巻全体を通じて四季部の配列をとっているもの。△印の巻は巻の中頃から巻末にかけて四季部の配列をとっているものである。△印の巻は巻全体を通じていないので、四季部の配列部分における体言止め使用率は出したけれども考察の対象からはずした。しかし、続千載集雑上の体言止め使用率が同集四季部の体言止め使用率より高いのは注目に値する。〔表3参照のこと〕

この他、続拾遺集雑下1284~1315、玉葉集雑四2289~2323の二ヶ所に四季部の配列が見られるが、これらは何れも哀傷歌のグループの一部と解すべきであるのでとりあげていない。

表6 恋部における四季部的配列一覧表

集名	巻	部立	歌数	大観番号	四季部的配列部分		
					歌数	大観番号	配列内容
△古今集	十一	恋一	83	469～551	10	542～551	春1夏2秋5冬2
×々	十二	恋二	64	552～615	15	577～591	春1夏2秋7夏1春3冬1
×拾遺集	十三	恋三	72	777～818	34	811～847	春2 ¹ 4 ¹ 1 ¹ 夏12 秋10 ¹ 冬5
×新古今集	十四	恋四	102	1234～1335	38	1250～1291	春4夏2秋29 ¹ 1 ¹ 1 ¹ 2 ¹ 冬1
△続後撰集	十四	恋四	76	860～935	34	902～935	春2夏8秋18冬6
×続古今集	十一	恋一	107	952～1058	7	1040～1047	春1夏2秋3 ¹ 冬1
△続拾遺集	十四	恋四	63	962～1024	49	976～1024	春8夏13秋20冬8
○玉葉集	十二	恋四	119	1601～1719	61	1601～1661	春6夏15秋39冬1
続千載集	十一	恋一	115	1035～1149	7	1075～1081	春2夏2秋2冬1
△新千載集	十四	恋四	102	1446～1547	59	1489～1547	春8夏9秋25冬17

〔註〕 ×印の巻は四季部的配列が不完全なもの

○印の巻は四季部的配列が巻頭から巻の中頃まで続いているもの

△印の巻は四季部的配列が巻の中頃から巻末まで続いているもの

□の中の数字は無季の歌の歌数

表7 続拾遺集卷十四恋四

九六二	うき身	夕暮	心	
三	わが身	忘るべき	心	
四	よそなる身	忘れむ	心	
五	我身	夕暮	心	
六	人	夕暮	心	
七	人	夕暮	心	
八	あふさかの道	今は		(絶恋)
九	逢坂	うき物と		(同じ心を)
九七〇	思ひもはてぬ	逢ふこと		
一	思ひし	逢ふこと		
二	思ひいづる	月		
三	思ひ絶えて	月みる		
四	思ひよそへて	月みつ		
五	思はねど	月		(寄月恋)
六	こひこひて	三日月		(同じ心を)
七	心恋	月		
八	心	月		
九	恋	あかつき		
九八〇	梅が香	おもひ		
一	梅の花	あけぼの		
二	梅の花・春の夜の月	もの思ふ		
三	花の便	思ひ出でなむ		
三	山吹の花	思ひそめけむ		

六	秋風・萩の下葉	秋風	下葉	秋風	うらめし	人
五	初雁	秋		風のたより		
四	槿	槿			あるかなきか	
三	朝がほの花	朝がほの花			それかあらぬか	
二	秋風	思ひ絶えぬる	秋風	風吹けば		
一	秋の夕暮	もの思ふ		浅茅生の小野		
1000	浅茅生の小野の朝露	思ひ		かた野		
九	天の川				(寄七夕恋)	
八	七夕・秋のためし				(七月七日)	
七	織女	思ひ				
六	夏衣	夏衣		うすくや		
五	夏衣・蟬	夏衣		うすき		
四	螢	螢	思ひ			
三	螢	物思ふ				
二	夏草	夏草				
一	菖蒲草	菖蒲草				
九九〇	菖蒲	菖蒲				
九	菖蒲	菖蒲				
八	郭公					
七	夏の夜	夏の夜			ねざめ	(夏夜恋)
六	夏の夜	夏の夜			あふ人	(夏夜恋)
五	葵	其名	かけて	葵		
九八四	葵草	名	かけて	葵草		

七	秋	秋	下葉	真葛原	恨みざらまし		
八	秋風	秋風	真葛原	秋風	恨みやはする	人	
九	秋	秋					
一〇	秋	秋				人	
一	下葉さへうつろふ		移るふ			人	
二	秋の夕つゆ	秋	うつろはむ	後瀬の山		人	夕つゆ
三	秋・下つゆ	秋		生田のもり	ことの葉	人	下つゆ
四	秋	秋	移ればや		ことの葉	色	
五	紅葉・秋の色・しぐれ	秋				色	
六	秋の夕暮・しぐれて	秋	我	しぐれゆく			
七	しぐれ・木がらし	袖	わが身	しぐれて	言のは	かはる	
八	しぐれ	袖		しぐれ	言のは		色
九	しぐれ			しぐれ			
一〇	しぐれ		冬ひとりぬる	しぐれ			
一	しぐれ・袖無月		ひとりぬる	しぐれ	さむければ		
二	霜				寒さに		
三	霧	契					
四	袖の水	ちぎり					

(一) は詞書 A・B は贈答歌をあらわす